

卒業します！

応用物理学科 高木 丈夫

2000 年度から始まった優秀教員制度であるが、他学科からの選出や、2 位での選出を含めて今回の受賞で 11 回目、3 年続けての受賞となった。もういい加減満足したので、勝手に殿堂入りさせてもらって、来年度からは被選挙者名簿から外れよう。

最初に受賞した頃は、本学科の物理博物館を立ち上げたり、課外特別授業をした事が受賞の主な理由であろう。受賞間隔が 5 年空いていて、次も、このような課外活動に携わったときに受賞している。その頃は、課外活動ではなく、授業を評価されて受賞したい、と思ったものである。もっとも、授業には十二分に自信があったものの、授業方針は成績がほぼ最上位の学生にしか受け入れられないのはよく分かっていた。

その状況が変わってきたのは、2006 年度から 2 年後期の統計力学を担当するようになってからである。物理系科目での統計力学は、必修授業の中においてほぼ最後に履修するもので、それまでの分野の全体像が得られていない限り、十分に理解はできない。そのため最初の 5 コマ分を、統計力学の話をしながらかつた分野の復習に割当てた。学生は、一度の授業を履修したところで、その分野が理解できているわけではない。もっとも、単純に教育で得られる理解など、極めて薄いものである。さて、他の先生方が地ならしをしてくれた所に不完全な理解で歪んで建てられた構築物を修正するのは、それほど難しいことではない。まあ、30 年以上の教育経験が在るわけで、学生の理解が薄い状況は、授業中に学生の眼を見ただけで簡単に判るし、その部分を他分野も含めて（明快に？）話してやると、学生は理解できた気にはなり、マインドコントロールも可能になる。そして、授業が上手いと思わせられる、ずいぶんと美味しいところである。ついでに言うならば、昨今のカリキュラム整備は余りに効率を重視しているように思えてならない。丸暗記で済むならばまだしも、学問の概念的な理解など、そんな簡単に得られるものではない。カリキュラムは、いろいろ重複したり無駄が在ったほうが横方向の継りも解り、ちょうど良いのである。もともと教育とは無駄も、手間暇も必要なものなのだから、過剰に整理することは不適當なのである。

ところで、肝心の統計力学の試験成績は悲惨なもので、必修科目にもかかわらず、合格率は 3 割強であった。しかしながら、優秀教員に選ばれて一番嬉しかったのがこの頃である。3 割強の合格率の授業をしながら、選出される意味を考えると、単純な人気投票での選出では無く、嬉しかった理由が判ってもらえると思う。さて、そうこうしているうちに、改組に伴って統計力学の授業が 3 年前期に移行してきた。そうなった途端に合格率は 7 割にまで上がってしまった。いろいろ解析してみると、授業時期が 3 年になったことで、統計力学を受講する下地が以前よりも格段に整備された、というのが正しい理解だと思う。一般的にも、この科目を 2 年後期で履修するのは、確かに早過ぎたと思える。数物系のように積立型で論理構築が重要な学問においては、学問自体を受容できるまでに時間が掛か

るのである。

さて、修学意欲の薄い学生に対しては、悪役として振舞ってきたつもりで在るが、これだけ合格率が上がってくると、それもあまり意味を成さなくなる。かと言って、善玉の演技はつまらなすぎる。それならば、悪役は他学科に教える専門基礎科目で演じ続けることにしよう。

最後に、このレポートを書くことも、もう無いであろうから、今までの授業方針を支持してくれた、修学意欲旺盛だった物理工学科と改組後の応用物理学科の学生諸君に感謝しよう。他学科で教えた経験からして、この学科でなければ、とてもこうは行かなかったはずである。